泡沫の夢

紅葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泡沫の夢

【Nコード】

N6664T

【作者名】

紅葉

【あらすじ】

夢をみる。いつも同じ夢だ。登場人物はふたりだけの恋愛劇。なぜだろう。男の紡ぐ愛の言葉はきいてるだけで心が軋む。いつも同じ夢をみることで以外は普通の青年はあるひとりの男と出会う。その出会いによって青年と、そしてその男も気づかぬうちに運命の歯車が廻りはじめる。

序章

序章

男がいる。若い男だ。まだ成人を迎えてまもないのか、幼い顔を
している。

しかし、稀にみることのないくらい的美貌で、女にも男にも引く
手あまたであろう
という容姿をしていた。

「 あいしてる、あいしてるよ 。 ずっときみだけをあいして
る…… 」

男はひたすらに愛の言葉を紡ぐ。その前に横たわるのは青白い顔
をした女である。

鴉のような真黒い髪を無造作にのばしており ただ、手入れは
していたのかきれい

な髪である 手足は枯れ木のように細い。まるでおとぎ話に出
てくる魔女のような
女である。

そんな女に男は愛をささやき続ける。女はもう息がないのか、そ
れとも動けるほど
の体力がもうないのか、反応がない。

しかし男はそんな女の反応にも構わず、壊れた玩具のように同じ
言葉を繰り返す。

どのくらい時間が経っただろうか。男がふいに口を閉じた。
そして女から視線をはずし、前を向いた。その男の目には強い意
思が宿っていた。

序章（後書き）

初投稿です。初心者ですが、精一杯がんばりますので宜しくお願いします。

第一話

「またあの夢か……」

男は目が覚めると、そうぼやきながら起き上った。しかしまだ起ききらないのか、目が半開きで口を大きく開けてあくびをしている。男の名前はマティアス・エディンベル。一応家は伯爵の爵位をもっているが、三男という気楽な立場なため、家を出て王宮勤めをしている。

マティアスがいまいるのは、王宮に勤めている者の住む寮である。宰相や大臣になると王宮に部屋が与えられるが、マティアスのような下っ端にはまだまだ先の話である。

ようやく目が覚め、食堂に行くと、もう友人たちがテーブルについていた。

「マシュー、おまえ今日も寝坊か？」

席につくなり話しかけてきたのは、アイザック・ターナー。マティアスの同僚であり、学生時代からの友人でもある。ちなみにマシューとはマティアスのあだ名である。

「おはよ。仕方ないだろ、夢見が悪かったんだから」

マティアスは不機嫌そうに言い返す。じつは、それほど夢見は悪くなかったのだが、ここ数日寝坊が多かったので、あまり言われたくないのである。

「なあ、きいたか？ キールのやつまたふられたんだってよ」

こいつは人の噂話が大好きで、どこから仕入れているのかマティアスの知らない情報。それほど重要なものではないが、をいっつも教えてくる。

「本当？ 今度こそ成功させるって息巻いてなかったっけ」

キールというのは彼らの同僚で、恋多き男である。一見女にだらしないようにきこえるが、単に彼が恋する女性がことごとく別の男にとらわれているだけである。

「花屋のメアリーだっけ？ キールもこりないね。」

「そう！ ふられた理由は好きな人がいるからっていわれたらしい。その好きな人っていうのがまたあのテオドルだつて！ すげーよなあ、城下の女の子みんなあいつに惚れてんじゃない？」

テオドルというのは、一年ほど前からこの国に出入りしている行商人で、城下の女性に大変人気のある男である。

噂にうといマティアスもその男のことはきいたことがあるらしい。

「そのテオドルだっけ？ そんなにいい男なのか？」

「あー何回かみたことあるけど、おれ女じゃねーしわかんね。それより今日仕事終わったら飲みにいこーぜ。うまい店みつけたんだ」
アイザックはテオドルの魅力については興味がなさそうだ。マティアスもそれほど興味があるわけではなかったようで、そのままふたりの話題は別のものに移っていった。

マティアスは朝食を食べた後、アイザックとわかれ、ため息をつきながら出勤した。彼はこの春に財務大臣のもとへ配属されたばかりで、やっと仕事に慣れてきたところなのである。仕事自体は下っ端の雑用でそう難しいものでもないが、上司である財務大臣や先輩方、ほかの同僚に貴族が多く、貴族ではあるもののどちらかという平民の考えを好むマティアスはあまり馴染めないのである。

「エディンベル、これやつといて」

仕事場につくなり先にきていた同僚に仕事を押し付けられてしまった。部屋にはマティアスとその同僚だけで、大臣や先輩方はきていない。いつもと同じだ。同僚は目上である上司や先輩のいるときだけまじめに仕事をし、それ以外はマティアスにまかせっきりである。立場は一応同じなのだが、最初に一回断ったときに理不尽な切

れ方をされ面倒だったので言うこときくことにしている。面倒なことや目立つことを嫌うマティアスの悪いクセである。

「はいはい、わかりましたよ」

マティアスは文句を言われる前にすばやく自分の席につく。同僚はなにか言いかけていたが、ちょうど先輩や大臣が出勤してきたので口をつぐんだ。

「今日はそれほど大きな仕事はない。各自自分の仕事に取りかかってくれ。」

一日の始めには大臣補佐が今日の予定を述べる。今日は大きな仕事はないそうなので、マティアスも一安心である。先月の予算会議のときは死ぬほど大変だったのだ。アイザックとの約束は守れそうだとマティアスはほっと息をつく。予算会議の後始末でずっと断ってきたので、そろそろアイザックの機嫌が悪くなりそうだったからちようどいい。

あまり楽しいとはいえない仕事だが、今日の約束のためさっさと終わらせようとマティアスは書類に向き直った。

第二話

仕事に没頭していたマティアスの耳に突然大きな鐘の音がきこえてきた。

毎日午後二時半に鳴る広場の鐘だろう。

この王宮には広場があり、そこにはかなり古いものではあるが、それでも美しい音を奏でる鐘があるのだ。

ここの国の人たちには午後二時半になると仕事や勉強、遊びをいったん中止して休憩をとる習慣がある。それを知らせるための鐘である。

ほかの同僚や先輩方が休憩をとろうと思いいいに動き出した。

そのせいかさつきまで静かだった室内が騒がしい。マティアスも休憩のため持っていたペンを置いて席を立った。

王宮の庭には色とりどりの花が植えられている。

毎日庭師たちが手入れをおこなっているおかげで、王宮の隠れた人気スポットである。なぜ“隠れた”なのか。それは王宮の入り口から少し離れているので、人目につきにくいからだ。

なので、ここを訪れる人間は限られる。そのためマティアスのお気に入りの場所でもある。

いつものように庭を散歩していると、花たちのなかから突如小さい人影が飛び出してきた。

「うわっ、なんだ!？」

とっさのことにマティアスは避けきれず、その人影にぶつかってしまった。

「っいつた〜！」

下の方から声変わりがまだ済んでいない子どもたちの声があった。その声をきいた瞬間、マティアスはこの場から逃げ出したくなった。

この王宮のなかで子どもといえればひとりしか思い浮かばない。

そう、国王の唯一の嫡子。御年十二歳になられる王子、アルベール様である。

マティアスは意を決し、王子と視線を合わせるように跪き話かけた。ここで見て見ぬふりはさすがにできない。

「……ぶつかって申し訳ございませんでした。大丈夫ですか、アルベール様」

そういいながら王子の体にけがなどないかざつと調べる。

……どうやらけがはないようだ。

マティアスは王子にけががなさそうだとわかると、ほつと息をつく。王子にけがなどさせたら大問題だ。それがマティアスのせいではなくても。

「うん、だいじょうぶだ。急にひとがいたからびっくりしたぞ」

マティアスは手を差し出し、王子が起き上げるのを手伝った。

「私も驚きました。まさか花畑のなかから人が飛び出されるとは思いませんでしたので」

失礼かと思っただが、素直に感じたことをいってみた。思いのほか動揺しているのか、ほかに気のきいた台詞が思いつかなかったのだ。

「うむ、そうか。それはすまなかつたな。探検中だったのだ。そういえばお前はだれだ？みたことのない顔だな」

「申し遅れました。エディンベル家の三男マティアスと申します。

この春から財務大臣付きの文書官として配属されました」

王子が知らないのも無理はない。

マティアスは貴族ではあるものの夜会に出ることは少なく、ましてや王宮勤めになったいま、下級文書官であるマティアスには王族に謁見することは許されていない。

マティアスが自己紹介を終えたとき、また誰かがこちらへ駆けてきた。

「殿下！ こんなところにいらしたのですね！ さあ、もう休憩は

おしまいです。お勉強に戻りましょう。まだ今日のノルマを終えていないでしょう」

眼鏡をかけた痩せた男である。マティアスより二、三歳ほど年上であるうか、というこの男はどうやら王子の教育係のようである。

王子は“探検中”だと思っていたが、おおかた教育係から逃げてきたのだろう。

「いやだ！ きょうは王宮のなかを探検するのだ。勉強よりもそっちのほうがずっとたのしい！」

マティアスは驚いた。さきほどの王子は自分の非を認め素直にあやまっており、わがままという印象を受けなかったからだ。

「王子……。わがままをおっしゃらないでください」
教育係の男も困惑顔である。

すこしこの男がかわいそうになってきたマティアスは助け舟を出してやることにした。

「殿下、殿下は国王様：お父上様は好きですか？お父上様のようになりたいですか？」

王子と男が急に話し出したマティアスのほうを向いた。

王子は興味深そうな、男は訝しげな顔をしている。

「ああ！ 父上はだいすきだ！ 将来はわたしも父上のように立派な国王になるのだ」

目をきらきらと輝かせながら王子はいった。マティアスはその言葉に頬を緩ませた。

「なら、お勉強をたくさんしてお父上様に負けないような知識と教養を身につけねばなりませんよ。なにも知らないお馬鹿な国王には誰もついてきませんからね」

その言葉をきいた王子と教育係の男は目を丸くした。“お馬鹿な国王”などと誰もいわないからだ。

「遊ぶことも大切だとは思いますが、勉強もせずに遊んでばかりですといずれ殿下は“お馬鹿”だと皆に笑われてしまいますよ」

教育係の男が口を開き、なにかいおうとしたが、それよりも先に王子が口を開いた。

「馬鹿”はいやだ！ ……そうか。父上のようにするには勉強しなければならぬのだな。たしかに馬鹿でなにも知らない国王にはだれもついてこないな」

マティアスはやはり、と思った。

この王子は賢い。わがままは言うが、それはまだ子どもだからだ。頭ごなしにいうだけではかえって反発してしまう。ゆっくり諭していけば自分で理解をし、正しい道へと進むのだろう。

現に、マティアスの言葉を理解し、納得している。

「フィル、わたしがまちがっていた。勉強はおもしろいかどうかは関係なくやらなければならぬ。よし、部屋にもどってつづきをやるぞ」

王子はいうなりさつさと歩いて行った。

教育係 フィルというらしい は王子の言葉に呆気にとられていたが、マティアスが腕を小突くと、あわてて後を追った。

王子は数歩進んだ後、マティアスのほうをむいて叫んだ。

「マティアス！ そなたのおかげで目が覚めた。ありがとう！」

まさか礼をいわれるとは思っていなかったので、またもやマティアスは驚いた。

教育係もこちらをむいて会釈している。

マティアスもあわてて頭を下げて王子たちを見送った。

しばらくして完全に王子たちが去るとようやく頭をあげ、思わずため息をついてしまう。

たった数分の出来事であったが、ものすごく疲れを感じた。

（さつさと仕事にもどって残りを片付けよう。今日はアイザックと飲みに行くんだから）

マティアスはそう思い、自分の仕事場へと足を進めた。

第三話（前書き）

遅くなつてすみません。
なかなか進まない…。

第三話

店内には仕事をおえた男たちが集まっている。皆思い思いに酒を
あおり、仕事の疲れを癒している。

マティアスがアイザックに連れられてやってきたのは、王宮から
そう離れていない一軒の食堂だった。

「ここではいろんな国の民族料理が食べられるんだ。安いしうまい
しで、結構人気なんだぜ」

「ふうん…。知らなかったな、こんな店があるなんて」
マティアスはアイザックの説明に相槌を打ちながら店内を見回し
た。

客の話し声で若干騒がしいとはいえ、比較的落ち着いた店内であ
った。従業員もしっかりとした対応ができていて、店のメニュー
も豊富である。

マティアスは早くもこの店が気に入った。

店の料理もおいしく、満足したマティアスは上機嫌で帰路につい
た。

アイザックは今夜女の所に泊まるらしく、店を出てすぐ別れた。

もう時刻は真夜中、暗闇を月明かりだけがマティアスを照らす。

城下町といってもマティアスを通っている道は裏路地で、犯罪も
起きやすい。

男でも気をつけて歩かねばならない所だった。

ふと前を見るとひとりの男がこちらに向かってきていた。マントを目深にかぶっており、顔をうかがうことはできない。怪しかったがマティアスはただの下っ端の文官であり、下手にかわると碌な目にあわないだろう。

そう思い、そのまま男の横を通り過ぎようとした。

そう、通り過ぎようとした。

マティアスの足は男の手前に来た所で止まっていた。

特にかかわりたいと思っていたわけでもないのに、マティアスはその場から動けなかった。

いつのまにか男も、マティアスの前で立ち止まっている。

ふたりは沈黙したままお互いを見つめていた。

「きみは…、」

先に男が口を開いた。しかし、なにか言い淀んだまま黙ってしまった。

マティアスも男も初対面のはずなのに、なぜか既視感を覚える。

お互い口を噤んだまま時間だけが過ぎていく。

今度口火を切ったのはマティアスだった。

「あなたの名前を聞いても宜しいか…？」

もしかしたら名前だけでも知っているかもしれない、とマティアスは男に聞いた。

「ああ…、わたしの名はテオドール。テオドール・ウィンザーだ」

テオドール、と呟いてみる。どこかで聞いた名だ、とマティアスが考えていると、テオドールは続けて言った。

「1年ほど前から、こちらで商売をさせてもらっている」

その言葉でマティアスは思い出した。キールが振られた原因の男だ。

「あなたが、テオドール…。おれはマティアス・エディンベルだ。王宮で文官をしている」

またもや沈黙がふたりを包んだ。

そして、テオドールが一步進んだと思うと、

「…マティアス、きみには懐かしいものを感じる。どうやらきみとわたしは近しい者のようだ。今夜はこれで失礼するが…、また会ったとき話をしよう」

そう言ってそのまま去っていった。

残されたマティアスはテオドールの後ろ姿をずっと見ていた。

やがてテオドールの姿が完全に見えなくなると、マティアスも寮に向かって歩き始めた。

第四話（前書き）

久々の投稿です。

なかなか書けません。小説って難しいですね。

第四話

あいしてる、あいしてるよ。ずっとときだけをあいしてる

……

「っ……！」

マティアスは目が覚めると同時に上半身を勢いよく起き上がらせた。

また同じ夢を見た。しかし、いままでは不鮮明だった夢が、明らかに鮮明に思い出せる。

昨日、なにか変わったことがあっただろうか。マティアスは昨日のことを思い返した。

（昨日は……。そうだ、王子に会って、それで……）

……テオドールに会った。

ただ会っただけなのにマティアスの心に引つかかる男。

（彼が原因なのだろうか……）

マティアスはしばらく考えていたが、一向に解決に至らないので諦めて朝食に向かうことにした。

今日も変わり映えのしない一日が始まる。

そう思ってマティアスは寮を出た。

しかし、もう運命の歯車は回り始めていた……。

いつも通り職場に向かい、いつも通りに雑用をしていると、なにやら焦ったような大臣が部屋に入ってきた。

「エディンベルっ！ マティアス・エディンベルはいるかっ!？」
部屋にいた者の視線がいつせいにマティアスに集まった。

マティアスは内心出て行きたくなかったが、そんなことはおくびにも出さずに返事をした。

「はい。マティアス・エディンベルは私ですが」
大臣はマティアスを視界に入れると、近くまで足早にやってきて、じろじろと無遠慮に見据えた。

「おまえが…？ まあ、いい。宰相様がおよびだ。すぐに宰相様の部屋へ行きなさい」

マティアスは耳を疑った。

（宰相様!? おれ、なにかしたかな…）

視界の隅では、同僚があんぐりと口を開けていた。

固まってしまったマティアスだが、大臣に怒鳴られてあわてて部屋を出た。

（宰相様って…、あの…）

マティアスの頭の中に宰相の姿が浮かび上がった。国王の幼馴染で侯爵家の出のエリート、マティアスの立場ではお目にかかることのできない、雲の上の人だ。

（なんでそんな人が…おれになんの用だ？ もしかして…）

マティアスは顔をさっと青く染めると、動かしていた足を止めた。昨日の出来事が頭に過る。

（王子に生意気な口をきいたのがばれた?!）

マティアスは倒れそうになったが、なんとか踏みとどまり、足を再び前へ動かした。気分は処刑台に向かう死刑囚である。

「……マティアス・エディンベル参上しました。入室の許可をお願いします」

「どうぞ」

「失礼します」

入室の許可があり、マティアスはできるだけ音を立てないよう慎重に扉を開ける。部屋の中には宰相のほかにも、なぜか中庭であった王子の教育係の男がいた。

予想外の人物にマティアスはドアノブを掴んだまま固まってしまった。

「……マティアス・エディンベル。なにをしているのですか。さつさと中に入って扉を閉めなさい」

宰相が呆れたように入室を促した。マティアスは慌てて部屋の中に入り扉を閉めて姿勢を正した。

「……失礼しました。あの……それで、お呼びいただいた用件はなんでしょうか」

宰相は男に一瞬目をやり、マティアスに向きなおった。

「貴方をわざわざ呼び出したのは、貴方にやってもらいたいことがあるからです」

何を言われるのかと、マティアスの身体に緊張が走る。宰相はそんなマティアスの様子など気にすることなく微笑みながら続けた。

「貴方に王子の教育係をやってもらいたいです」

「……………は？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6664t/>

泡沫の夢

2011年10月9日03時58分発行